

釋を得たるものなりと曰ふべし。

尙茲に注意すべきは磨延賧の紀功碑中、南面第十行に

Oruqun balıqlıy bälkitintä I öriğnin anda örgipän ititdim il äbi[n] ……

即ち Ramstedt 氏の譯に従へば

An der Vereinigungsstelle des Orkhon und des Balklig („des fischreichen Flusses“) liess ich dann den Reichshof aufführen und das Reichshaus …… (aufbauen) ……

と記せしむ。balıqlıy は實に氏の註付せるが如く、古代トルコ語にて「魚多き」の意にして、蒙古語にては džarmänté と曰ふに當れば、水道提綱に朱爾馬臺河、蒙古游牧記に濟爾瑪台河と記せるものにして、元代の和林河に相當す。Ramstedt 氏は此の記事を以て、回鶻の都 Kara Balgassun の建設を記せるものとし、實に Kara Balgassun は此の Džirmantu 河に沿へるものなりと曰へり、^{〔八四〕}高昌僕氏家傳に「和林有三水焉、一竝城南山、東北流、四幹耳汗、一經城西、北流、曰和林河、一發西北、東流、曰忽魯班達彌爾、三水距城北三十里合流、曰僕輦傑河」と見ゆれば、こゝに Orkhon 河と Balıqlıy 河即ち和林河との合流する所に於て宮殿を建てたりと記さるゝものを以て、

Kara Balgassun の建設を説けるものなりと見るは必ずしも當を失するものには非るべし、而して此の事件は兎の年(天寶十載)と羊の年(天寶十四載)との間に配せられたれば、此の四年間の中の一年に相當するものなること疑なし、然りと雖若し果して此の如しとすれば、前に述べたる磨延賧の父裴羅が、九姓可汗の位に上るや Tola 河畔より南下して、牙を烏德韃山と昆河との間、即ち Kara Balgassun の地に定むるに至れりとせる唐書の記事